評　価・改　善　～個に応じた指導や授業改善等に生かすために～

授業の展開に生かす評価（児童生徒の学習状況の見取り）

教師は意識的にまたは無意識のうちに１単位時間の授業の中で、児童生徒を認め、励まし、褒めるなどの評価を何度も行っています。評価を難しく捉えるのではなく、児童生徒の感性を大切にし、学習に対する意識を高め、新たな「問い」を引き出し、学習意欲を高めることが評価の役割だと考え、実践を積み上げていきましょう。

こんな授業になっていませんか

△「めあて」「身に付けさせたい力」等が明確でないため、何を見取ればいいかが曖昧になっている。
△教師の見取り（評価）の視点が「正解か否か」のみに偏っている場合がある。

○評価規準を明確にする。

「身に付けさせたい力」が明確でないため「知識・技能」を評価したいのか、「思考・判断・表現」の力を評価したいのか分からない授業を見かけることがあります。

事前にめざす子供の姿をイメージすることで、見取る視点（評価）を明確にしましょう。また、どんな場面で見取るかを設定することで、児童生徒に対する手立て（仕掛けや発問など）を工夫することができるようになります。

○児童生徒の資質・能力を伸ばすための評価にする。

「めざす子供の姿」も「評価規準」も明確に設定されていますが、「教える」という気持ちが先行しているため、授業の中の指示や質問等で「〇〇を見て」「これがどうなる？」「そうそう。だから…になるよね」など、一問一答形式のように進めてしまう授業を見かけることがあります。

これでは、児童生徒が考えるのは「教師の意図する答えを探すこと」になってしまいます。こうした場面では、児童生徒自身で見方・考え方を働かせているのではなく、教師が動かしているだけになり、児童生徒自身で学び方を身に付けていることにはなりません。

どこに着目し、どのように考えるかを明確にもって授業を行い「どうして？」「なぜ？」など効果的な発問（問い返し）を用いることで、考えのよさや可能性を引き出しましょう。

こんな授業になっていませんか

△ 授業中の児童生徒の学習状況を把握し、その後の授業展開に生かすことができていない。
△ 机間指導が場当たり的で、目的が定まっていない。

○学習状況を見取り、授業展開に生かす。

評価の意識が十分でなく、発言力のある一部の子供とのやりとりで授業が展開されていたり、一部の児童生徒につきっきりになり、全体の状態が見えなくなっていたりする授業を見かけることがあります。学級全体の学習状況を見ると、教師の発問の意図がつかめていない子、指示された作業を終えて時間をもてあましている子、一言も発言することなく黙々とノートを書いている子など様々です。学級全体の学習状況を適宜把握（評価）し、個々の考えを学級全体に広げたり、ペアやグループ活動を取り入れたりするなど、発言や表現の機会を適切に設け、児童生徒の思いや考えを見取れるような場や方法を工夫しましょう。その判断の手掛りは、机間指導を基本としましょう。

○目的をもって机間指導を行う。

児童生徒の学習状況を把握するためには、目的をもって机間指導を行わなくてはなりません。例えば、子供に問題等を提示した際に、学級全体の進捗状況を確認するのか、問題の解答の内容を確認するのかなどが考えられます。話し合い活動であれば、全員が話し合いに参加しているか、児童生徒がどのような意見を出しているのかを確認するなど、どの場面で何を評価するのか、などの意図を教師がしっかりもち、評価場面から子供の学習状況を見取り、授業展開に生かしましょう。

【机間指導でよく課題として指摘される内容】

△ 児童生徒の反応の予想ができていないため、多様な思いや考えを拾うことができない。
△多様な思いや考えを見取っているが、事前の計画がされていないため、授業展開に生かされていない。
△ 具体的に「何がよいのか」意味付け、価値付けされたフィードバックになっていない。

机間指導は「実態把握」「個別指導」「指名計画」等、その後の授業展開を大きく左右する重要な目的を持っています。そのため、事前に児童生徒の反応を予測し、それらの反応をどのようにして授業に生かしていくのかを計画しておくことが大切です。

指名する順番によって児童生徒の思考をつなげたり、共通点を見い出す視点をつくったりすることもできます。また、矛盾を感じさせて「問い」を生み出すことも可能です。さらに、児童生徒の様々な「問い」や反応に対して、どのように「価値付け」し「承認」あるいは「励ます」かを考えておく必要があります。

こんな授業になっていませんか

△ 児童生徒の反応が乏しく、見取ることが困難な場合がある。

〇要因を明確にした対応を工夫する。

何が要因となって「反応が乏しくなるのか」を明確にする必要がありますが、このような児童生徒でも、復習や定着のためのプリント学習をすると集中して主体的に取り組む姿を見かけることがあります。ですから、どのような場面で児童生徒が安心してアウトプットできるかを見極めることも大切になります。そこを糸口にして、子供の考えのよさや可能性を見取ったり、間違いであっても「どうすれば間違いを少なくできるのか」皆で考えたりするなど、しっかりとした「価値づけ」で「承認」「励まし」を増やしていくことも改善策の一つです。大切なことは、安心してアウトプットできる環境づくりにあります。

指導計画（評価規準）に基づく確実な評価と授業改善

学習評価は成績を付けるためだけのものではありません。教師による指導の結果を評価し、評価を授業に反映させることが重要です。（指導と評価の一体化）

こんな授業になっていませんか

△ 単元テストや定期考査の点数のみで評価している。
△ 評価を授業改善につなげる意識が弱い。

〇多面的・多角的な評価を行う。

単元テストや定期考査などのペーパーテストで測れる学習状況は一部にすぎません。児童生徒の資質・能力を多面的・多角的に評価していく必要があります。例えば、あらかじめ評価項目を設定しておきチェックリストで確認したり、児童生徒の思考過程がわかるようなワークシートを作成し理解度の評価を行ったり、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の製作など、多様な活動に取り組ませ、パフォーマンスを評価したりするなどです。また、子供一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにするために自己評価や児童生徒同士が相互に評価し合うことも重要です。教師は、子供たちが行っている学習にどのような価値があるのかを認め、子供自身にもその意味に気付かせていくことが求められています。

〇評価を授業改善につなげる。

学習内容を確実に身に付けさせるためには、おおむね満足できる状況と判断されるものである「B評価」を設定し、本時の評価を授業改善につなげることが大切です。形成的評価により、各単元内の学習理解・習得の状況を把握し、その後の学習指導の改善に生かしましょう。総括的評価でも同様です。評価は「子供が〇〇だから△△ができなかった」というものではなく、「〇〇の指導が徹底できなかったため子供に△△を身に付けさせることができなかった」という結果をもとに授業を工夫したり個別の支援を行うなど、日常の指導の中で評価が学習指導の改善に生かされていることが重要です。